

宮園楽(かっぱ祭り)

耶馬溪町大字宮園 豊八幡神社

宮園楽保存会

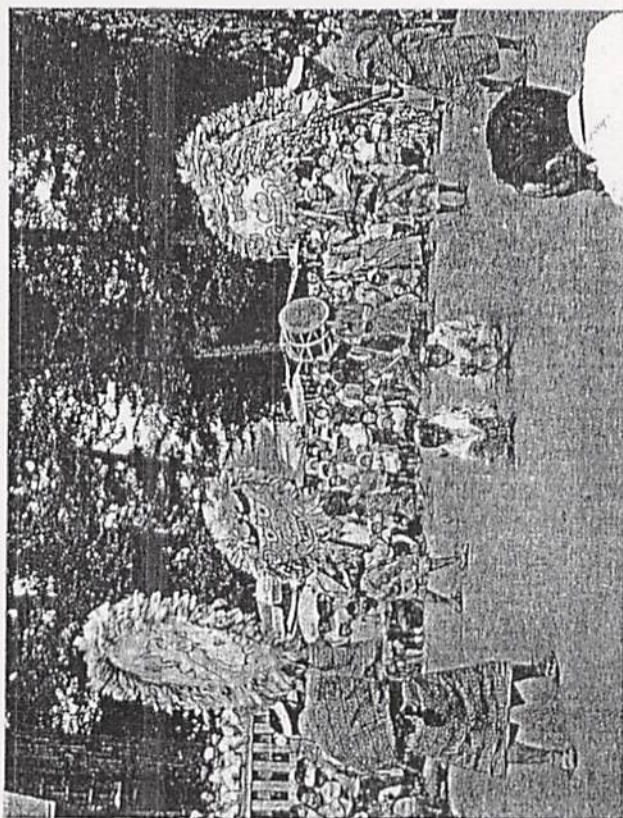
町指無民 平成元年五月一日

令和元年(一、二九四)頃(推定)

耶馬溪町宮園の豊八幡神社で毎年七月二十七日・二十八日に行われる祭り。保存会員によって奉納される。

この行事は山岡川畔で祓いの神事に始まり、カッパに扮した五・六才の四人の男児を中心に、豊年と手拍・横笛・鉦・太鼓・

チヤンボシを持った総勢四十人余の行列が、にぎやかに道樂を奏てながら境内に繰り込み陣を揃え、一時間近く踊りぬく。この行事は約一〇〇年前から伝えられてきた郷土民芸で、郷民に追われた平家の落人の苦悩が、カッパに化けて農作物を荒らし、牛馬に害をなす。又水辺で遊ぶ子ども達の生命をも奪うことから、カッパの憂を慰めるため、この神事を氏神の神前に奉納して人畜の守護や厄払い、五穀豊饒を祈願するものである。これと同じ行事が、島の大久保大神宮で橋山路楽として、氏子によって奉納されているが、内容は同じである。



大野八幡神社やんさ祭

耶馬溪町大字大野

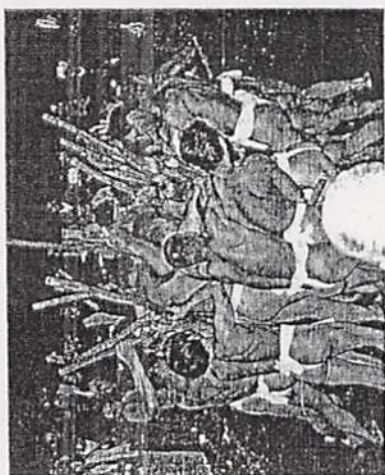
大野八幡神社やんさ祭保存会

町指無民 昭和五〇年一月一〇日

応永元年(一、二九四)頃より始まる。

津民荘長行成・野中龍登・弘道が、応永元年(一、二九四)鎌倉より鶴ヶ岡八幡宮の神霊を勧請した時に、野中の若侍三十三人が、饗餅をついて神前に供えたのがこの行事の始まりである。

この行事は、毎年十二月二日の寒中の夜に行なわれる勇壮な饗餅つき祭りである。三十三人に因んで決められた三升三合三勺のもち米を、神宮のお供えを受け、一俵の餅を若者達が、かけ所勇ましく「やんさ、やんさ」と、六尺の檜の杵で、七臼半の餅をつく。つき終ると同時に、威勢のよい掛け声にて、白を守る座元備と、これを倒そうとする氏子側とにわかれた壮烈な攻防戦がある。最初の一臼は神前に供える饗餅と、後で若者達が行なう直会の吸物餅にする。二番臼からは厄除けの餅として参拝者に配る。



岩戸神楽

一、耶馬溪町大字深耶馬、大字戸原。

二、深耶馬神楽保存会、戸原神楽保存会。

三、町指無民 昭和五〇年一月一〇日

七、耶馬溪地方の神楽は、概ね岩戸神楽または豊神楽(大正豊國と呼ばれた福岡県の一部と大分県の一部)と称し、更に豊前神楽と豊後神楽にわかれるが同形である。豊前神楽は動きが激しく、豊後神楽は静かな舞といわれる。これらのルーツを探ると、佐知(三米村)佐助神楽の流れてあると言われる。この種の神楽は町内で橋山路・大野・戸原・柿山といくつもあつた様だが、現在では戸原神楽一城井地区と、深耶馬神楽の二社がある。神楽社の構成は、はやし方(太鼓・笛・手拍子)の三名と舞い方が六名必要で、少なくとも九名以上の人員で構成されている。



神楽の種類は、主神楽十八番、神楽三十二番があり、これ以外に地固、馬立がある。しかも、これ等の舞は槍の舞(てうらまい)歌の舞(あらも)の二つに大別されている。出し物は古事記・日本書紀、または、風土記に出る神話が多い。戸原神楽は、昭和三年の耶馬典に習い、奉祝に舞つたのが始まりと言われ、深耶馬神楽は、衣冠武家の断がい上にある金比羅宮の祭りで、村人達が我流に舞つていたものを、佐知の佐助という人が教えたのが始まりと言われている。

戸原神楽

1 番
鎮 座

2 番
宝 満

3 番
幣宝満

4 番
大 神

5 番
掛手草

6 番
刃宝満

7 番
幣証護

8 番
美々久

9 番
御 先

1 0 番
剣 舞

1 1 番
御子舞

1 2 番
米神楽

1 3 番
山 神

1 4 番
五大神

1 5 番
乱御先

1 6 番
綱御先

1 7 番
神 迎

1 8 番
大蛇退治